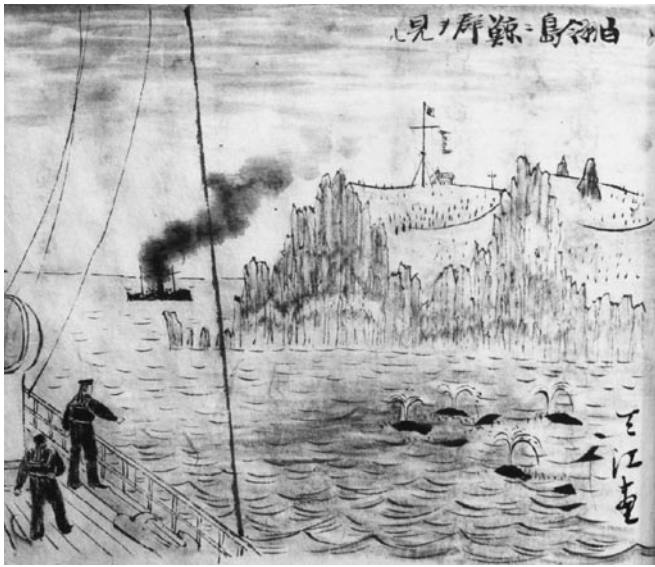




# 永浜宇平の生涯 1

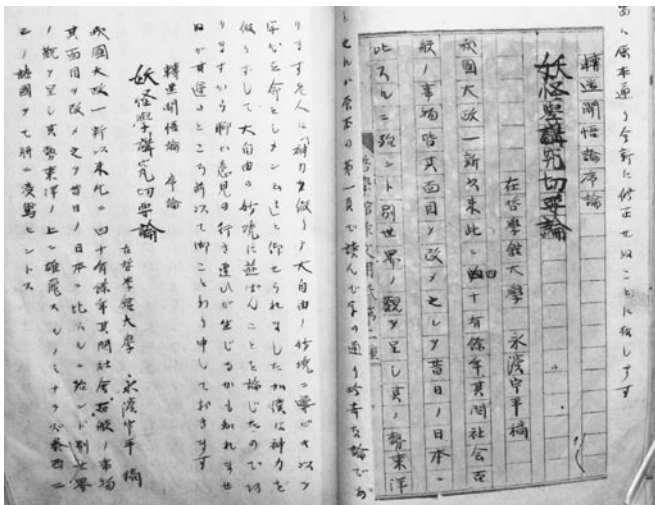
（丹後が生んだ偉大な郷土史家）



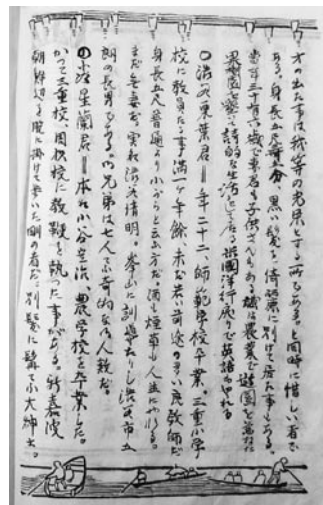
「観戦日誌」(『紅潮』第十号上巻)



「大江山鬼賊退治」



「夢界老人へ」(『紅潮』第九号上巻)



夢汀楼 (西垣梅治)「三重の社友」(『紅潮』第拾壹号下巻)



## はじめに

永浜宇平(一八八〇—一九四一)は、三重村(現在の京丹後市大宮町三重)に生まれ、生涯の大半をこの地で過ごした郷土史家です。

宇平は、小学校卒業後、哲学館(現在の東洋大学)の井上円了のもとで学んだ時期がわずかにあるほかは、夜学や通信教育・独学で学び、研究の基礎を形づくりました。そして家業の農業のかたわら、大正一(一九一〇)年発行の『三重郷土志』を皮切りに、『与謝郡誌』・『丹後宮津志』のほか、戦時下に入ったため未刊に終わった峰山町誌・日置村誌・岩瀧町誌など多くの郡町村誌の編さんを行いました。

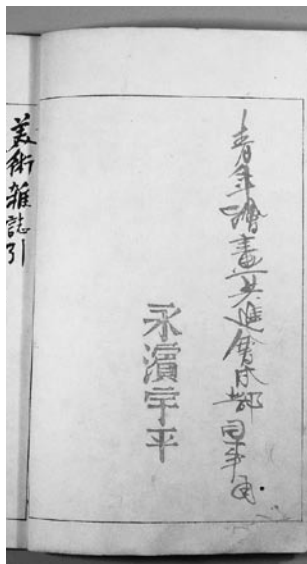
宇平は、これら郡町村誌編さんにあたって、各地に点在する数多くの資料の収集・筆写を行いました。これら宇平が筆写した丹後地域の史料のうち主なものは、橋本信治郎・小室洗心との共編による『丹後史料叢書』第一〜五輯に収録されました。その後、『丹後史料叢書』へ収録できなかった史料の一部は、木下幸吉編集による『丹後郷土史料集』第一輯・第二輯(第三〜六輯は未刊)に収録されています。

このほか、昭和二年三月七日に発生した北丹後地震を契機にまとめた『丹後地震誌』や社会経済史研究、古美術研究、石造物研究などの論文が多数あり、丹後地域の郷土史研究に大きな足跡を残しました。

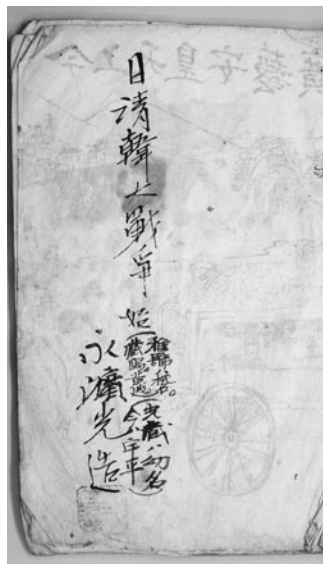
このように多くの足跡を残した宇平の業績をまとめたものとしては、宇平が昭和七年に自費出版した自伝ともいべき『言行三束』のほか、没後すぐに発刊された『郷土と美術』の永浜宇平追悼号(以下、『追悼号』とする)、宇平の生前に小室洗心が取材した「丹後を語る(其の三十六)郷土史家永浜宇平氏」(『丹後縮緬』第二百一十五号、以下『縮緬』とする)や奥丹後地方史研究会によりまとめられた『丹後の大郷土史家永浜宇平の業績と略歴』、京都府立丹後郷土資料館の特別展示『丹後郷土資料と永浜宇平』などがあります。

これらの内容を踏まえると、宇平の生涯は、  
 ① 宇平の思想や研究方法の確立過程であり、郷土史家としての宇平の方向性を決定付けた『三重郷土志』の発刊まで(大正一一年まで)  
 ② 『与謝郡誌』から『岩屋村誌』まで、大量の町村誌の執筆を行い、自伝『言行三束』を執筆した時期(昭和七〜八年まで)  
 ③ 入会山林問題への対応と晩年の町村誌編さん

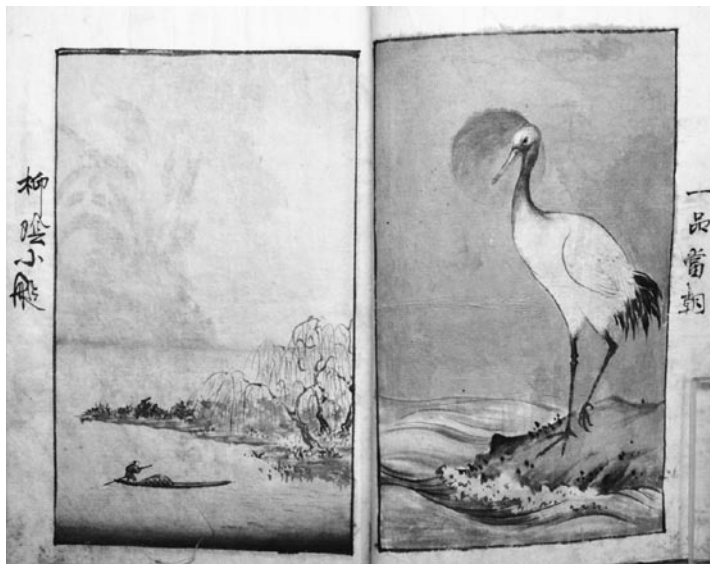
の大きく三期に区分できます。  
 本冊子では、①の時期について見てみるものとししました。



『御代の花』巻の表



『日清韓大戦争始』



水墨画「一品当朝」、「柳陰小艇」(『紅潮』第五号)



海軍応招絵日記



鉛筆画「伊予国温泉郡釣島灯台」(『紅潮』第七号)

## 絵を描く

幼少期の宇平の姿は、澤村秀夫の「永濱先生を偲びつ」、「(追悼号)」の一文にまとめられています。要約すると次の通りです。

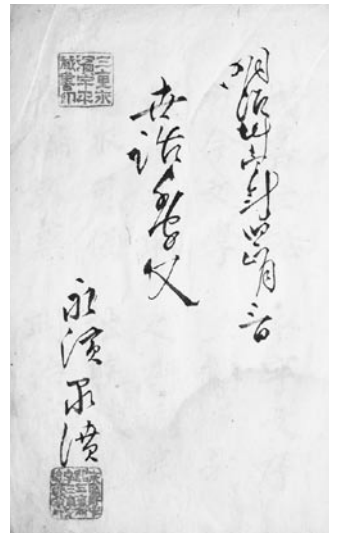
宇平は、明治二三(一八八〇)年九月二六日、父永濱甚右衛門、母もと(中郡周枳村松村氏女)の次男として生まれました。幼名は光蔵といい、後に宇平を名乗っています。兄の吉蔵は、日清戦争で亡くなったため、次男の宇平が家を継ぎました。幼い時から勉強好きで、小学校へ上がる前から紙一枚をあてがっておくと絵や字を書いて遊んでいたといいます。小学校卒業後は、ほとんど独学で講義録などにより勉強していたようです。また宇平の家は、夜いつ通っても灯りがついているので、夜も寝ずに勉強しているらしいと噂されていたそうです。

宇平自身は、「禁画に就て」(『紅潮』第十二号下巻)の中で、幼少期から絵を描くことが好きで、母の親元の周枳村(京丹後市大宮町周枳)の周徳寺や地元の万歳寺で仏画を見て感動したことから仏画も描き始めたが、不動明王像(後に岩屋寺へ奉納)を年上の人に侮辱され、十二歳の春以降は仏画のみを禁筆にしたことを記しています。後に紹介する回覧雑誌『紅潮』誌(大正四〜六年)には、巻頭の絵や「倶楽部合作図」などをたくさん描いているほか、本文中に投稿されたものには小学校時代の水墨画や青年期の鉛筆画があります。『紅潮』誌のほかには、小学校卒業後の作品と思われる「日清韓大戦争始」「皇国貴顕今上天皇太子肖像」「大江山鬼賊退治」などが残されています。なお「日清韓大戦争始」には「光蔵ハ幼名今ハ宇平」「大江山鬼賊退治」には「画者十五歳永濱光蔵」とあります。光蔵が宇平の幼名で、十五歳以降には宇平を名乗ったことがわかります。

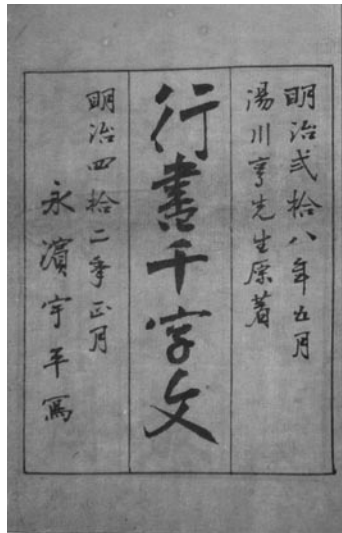
宇平は、後の町村誌や『丹後史料叢書』などの編さんの際に、多くのスケッチや精緻な図を残しています。その基礎は、子どもの時から絵の才能にあったと言っても過言ではありません。いずれにしても宇平の残した絵は、精緻なものからコミカルなものまで多彩であり、その才能には驚かされます。

なお、残された資料にある『御代の花』巻の表は、明治二四年に設立された「日本青年絵画共進会」(京都、顧問は富岡鉄斎)が翌二五年に発刊したものです。「青年絵画共進会本部日本画 永濱宇平」と朱書きされていることから、この時期の宇平は絵を学ぶために、この会と何らかの関わりをもっていた可能性があります。

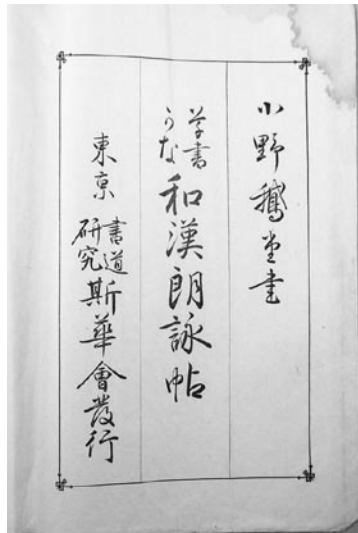




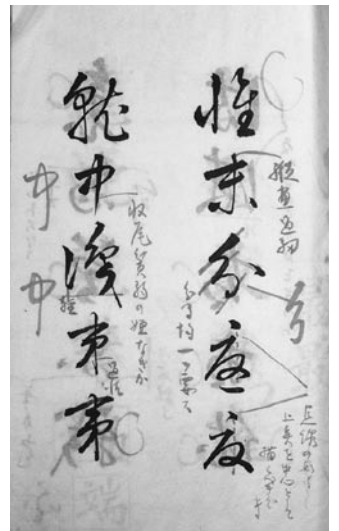
世話千字文



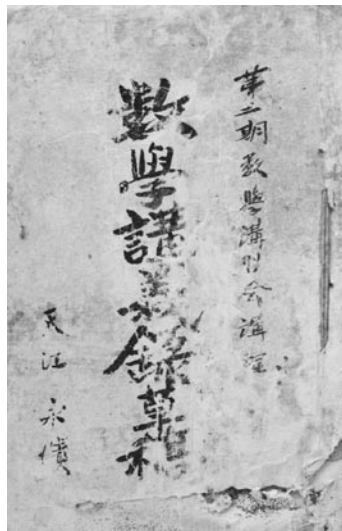
行書千字文



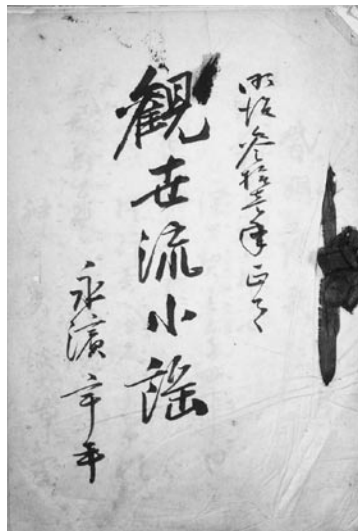
『草書かな和漢朗詠帖』



草書添削



数学講義録草稿



観世流小謡

冥々心鏡寫百怪 假怪儂怪又真怪 日月星辰為天怪 風雷電雷為氣怪 春夏秋冬為時怪 陰晴陸震為地怪  
 金五奇石寫驕怪 珍草異木為植怪 妖禽靈獸為動怪 唯知本末為假怪 妖怪淵藪為人怪 人怪更開六根怪  
 妄慕美色為眼怪 妄耽美音為耳怪 妄記美香為鼻怪 妄貪美味為舌怪 妄好安逸為體怪 妄逐乘具為意怪  
 六淫變化最可怪 唯知假儂雜怪 落々乾坤為心怪 忽看現十方空怪 時會三陰為限怪 万象羸形為名怪  
 古今聖賢為斯怪 千考萬思得壹怪 眞破假雲為靈怪 冲天日月是真怪 於岩手縣中陸 三丘啓司撰  
 明治參拾甲午年四月感拾五日 妖怪學研究修了即時 丹山居士 永濱守平書

「題妖怪」書

### 書をたしなむ

「天江」という雅号を用いた宇平が残した資料のうち、絵画と並んで特徴的なものには書があります。宇平が書を学んだ時期は不明ですが、大正四〜六年の回覧雑誌『紅潮』誌には、巻頭の題字や目次上部の書に数多く揮毫しており、同人の夢汀楼（西垣梅治、後に宇平の助手となる小関梅治）は、「三重の社友」（『紅潮』第拾壹号下巻）の中で宇平を「鴛堂流」と記しています。

残された資料のうち明治三二（一八九八）年の「世話千字文」は楷書、明治四二年の「行書千字文」は行書、大正七（一九一八）年の「草書講習録」は草書のテキストです。そのため宇平は、楷書→行書→草書の順に学んでいた可能性がります。このうち草書については、大正九（一九二〇）年前後の通信添削が残っているため、『紅潮』誌の時期から大正九年までの間に小野鴛堂の通信添削に学んでいたことは間違いないようです。隷書は、明治三四年四月の「題妖怪」がもつとも古い作品であり、楷書の次に学んでいた可能性がります。宇平は、『紅潮』誌や『言行三束』の巻頭題字、自宅の襖の書など多くの隷書の作品を残しており、大変好んでいたことがうかがえます。

### 数学と製図

宇平は精緻な図を多く残しています。その基礎としては、絵の才能とともに、数学の知識に裏打ちされていたようです。『紅潮』誌上には暦の議論の根拠として数式を示しているものや友人から借りた「塵却記」の間違いを訂正した話を記しており、水路疎通事業では勾配計算をしています。このような宇平の数学の知識を示す資料としては「第二期数学講義録草稿」があります。残念ながら年代は不明ですが、明治時代後半から大正時代初期の宇平は、通信教育ないしは夜学など何らかの形で数学を学んでおり、その後、地元の数学科講習会の講師をつとめるほどであったことがわかる資料です。

### 観世流小謡をたしなむ

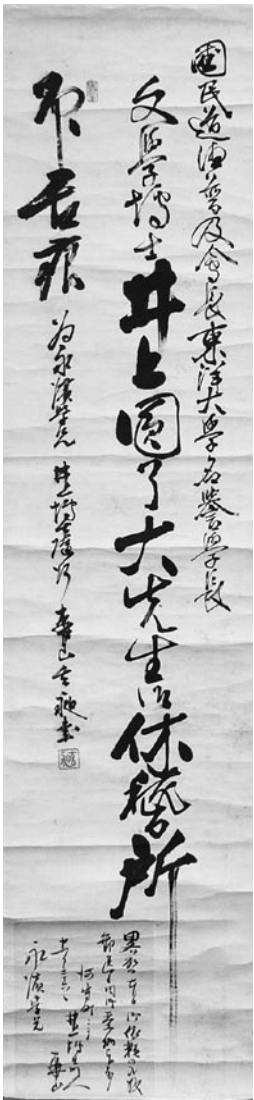
宇平は、明治三十一年正月に、周枳村で行われた観世流小謡稽古会に参加しています。哲学館に学ぶため上京する直前の時期にあたります。周枳村は宇平の母方の里にあたるため、その関係から参加したものと思われる。青年期の宇平の趣味の一端を知る上で貴重な資料です。



井上円了銅像（東洋大学井上記念館前）



井上円了書「眞」



「井上円了大先生休憩所」書

## 井上円了の影響

宇平は、「哲学館（東洋大学）宗教学部の出であります」（『橘臯島君に与ふ』『紅潮』第二十二号）と自ら記すほか、『紅潮』誌上や著書の中で哲学館の井上円了のもとで学んだことを記しており、生涯にわたって円了を師とおおぎました。円了も紀行文「南船北馬集」の中に「当地には哲学館出身永浜宇平氏ありて尽力せらる。」と記しています。宇平は、『紅潮』誌上に寄稿した幽霊や妖怪に関する原稿に円了の文章を数多く引用しており、同人たちと議論を行っています。

宇平が円了のもとで学んだ時期は不明ですが、「題妖怪」隷書に「明治三十四年四月廿五日 妖怪学研究修了即時」（一九〇一年）と記すことや、円了が主催した『妖怪学雑誌』第一二、三三三号の記事に宇平からの報告があること、『Nagahama. Nipponkwan.』とペン書された『一年有半の哲学と万世不易の哲学』（前田長太著、明治三十四年）をもっていたことから、明治三三、三四年前後に在籍していた可能性が高いようです。この前後、明治三三、三四年の伊勢参宮（『紅潮』第五号）のほか、明治三三年五月二〇日には、撮影場所は不明ながらアンブロ湿板の肖像写真を撮影しています。桐箱の「福井」割印は写真師を示すものと思われ、東京で撮影された可能性もあります。いずれにせよ哲学館在籍前後の宇平の姿をうかがえる貴重なものです。

また大正五（一九一六）年一月の円了来丹では、国民道徳普及会より円了の巡回講演会場を各町村と協議した上で準備し、あわせて宿泊場所の手配を依頼されています。宇平は、一月一七日に峯山校にて円了と面会し、講演を聴いています。その後、二二日午前の延利校・午後三重校の講演を聴講し、その日の万歳寺宿泊では夕食をともししています。翌日午前、円了は宇平宅にて休憩し、その折に円了は回覧雑誌『紅潮』を閲覧しています。また宇平が差し出した博士四三歳の御写真（博士が真中で田中哲学館講師と野田文学士が左右に外に塚原文学士と私と五名撮影した写真）を見えています（『博士の談片』『紅潮』第十八号）。その後、円了から宇平へは、年賀状（『一筆啓上』『紅潮』第十八号）や哲学堂絵葉書などが送られています。

宇平のもとには、大正五年に井上円了が揮毫した書「眞」のほか、宇平宅にも掲げられたと思われる「文学博士井上円了大先生御休憩所」書（円了の門人の森山玄昶の書であり、森山が一月二六日に河守町より宇平のもとへ送ったもの）が残されていました。



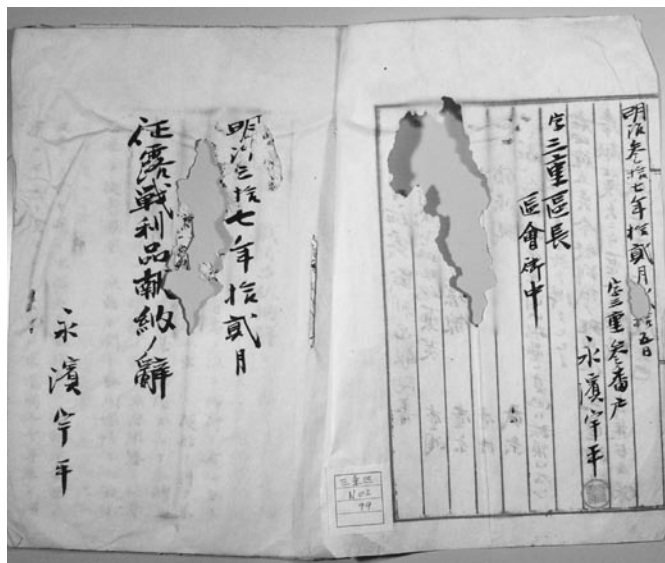
三重神社（京丹後市大宮町三重）



北米旅券



三重神社献納品



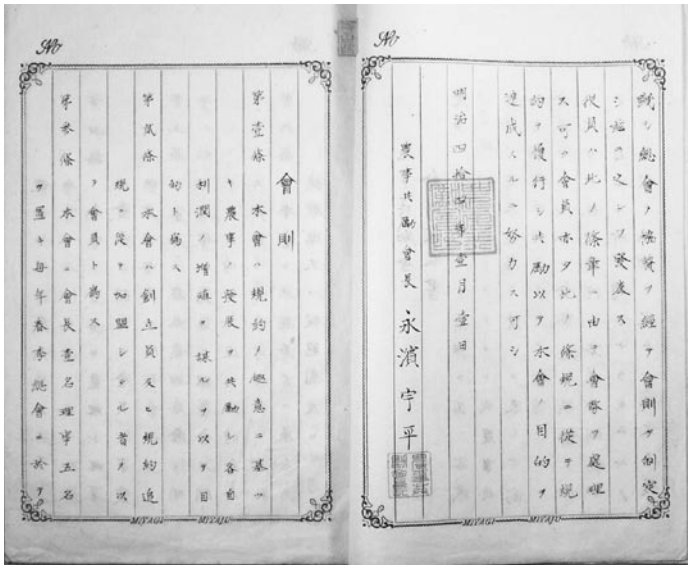
征露戦利品献納ノ辞

## 北米旅行

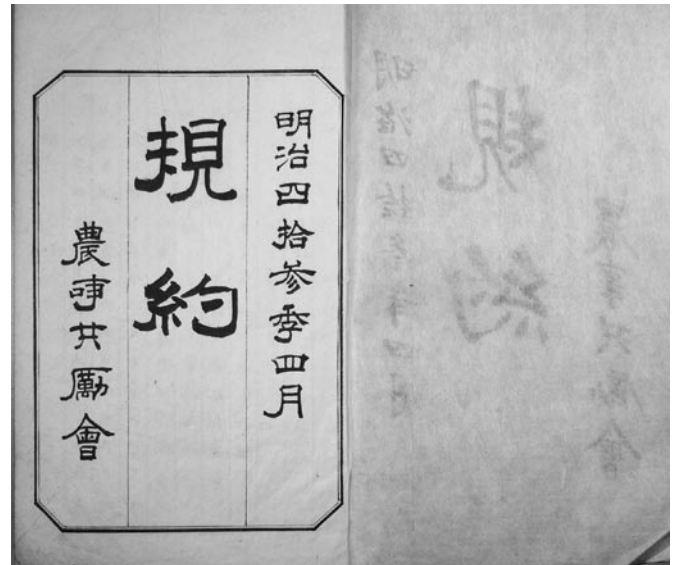
宇平は、哲学館で学んだ後、今度はアメリカへ行くことを計画します。明治三六（一九〇三）年一月、宇平は親族による身元保証書を添え「百合販売状況視察」を目的として旅券申請を行います。翌三七年二月に旅券は下付されました。その後、宇平は七月二六日に横浜を出港し、八月二三日にビクトリア（カナダ）を経由して、八月一九日にサンフランシスコ（アメリカ）に到着していることが旅券に押された印からわかります。実に二五日間の船旅でした。この時の船旅について宇平自身が書き残したものではありませんが、小室洗心は「無銭旅行のしかも赤毛布式の冒険渡航をやり、食うや食はずで異邦のあわたしい遍歴を続け」と表現しています（『縮緬』）。宇平が渡米する前後の時期には、フロリダに Yanato Colony と呼ばれる入植地が作られ、宮津出身の森上助次・酒井襄や丹波村字橋木（京丹後市峰山町橋木）の沖光三郎などの人々が移住していたことがわかっています（川井龍介「世界のなかの日本と世界（第一回・二回）」ウェブマガジン『風』 <http://kaze.shinshomap.info/index.html>（二〇一〇年））。しかし宇平自身は渡米のことを書き残しておらず、その目的や渡米により宇平が受けた影響、森上などとの関係は不明であり、今後の課題です。

## 日露戦争

宇平が渡米した時期は、日露戦争が始まった時期でした。宇平が明治三十七年二月に記した「征露戦利品献納書」（三重区有文書）には、「桑港（註：サンフランシスコ）ニ上陸スルヤ 時ニ鴨江ノ快報ヲ耳ニシ堡蘭ニ到テ旅順閉塞ノ壮拳九連ノ□電鳳凰ノ快報ヲ聞テ翻然感悟スルトコロ」があり、「英領加奈陀ヨリ宇平ニ帰朝シ陸軍病院船横浜丸ニ乗組ミ龍巖浦安東縣大狐山」に至るが病氣になり帰国したことを記しています。『紅潮』誌には、明治三十七年一月二三日写生の「伊予国温泉郡釣島灯台」鉛筆画（『紅潮』第七号）があり、また一月三日には軍船加賀丸に乗り日露戦争戦地へ赴いたことがわかります（『観戦日誌』『紅潮』九号上巻）。帰国の船旅の時間を考えると、宇平のアメリカ滞在は一ヶ月足らずと推定されます。宇平は、一月一日午前に、軍の許可を得て剣山砲臺に上がり、午後には戦利品を得て下りたことを記しています。その際に得た戦利品は、加賀丸が大坂へ寄港した際に郷里へ送られ、その後、三重神社へ奉納されています。



農事共励会会則



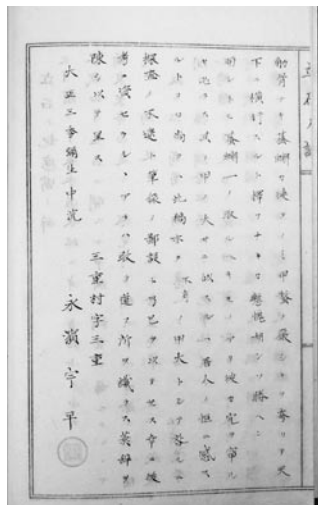
農事共励会規約



立石大逆修塔 (京丹後市大宮町森本)



立石之記



## 郷里へ戻る〜農事共励会〜

日露戦地から帰国した後の宇平の行動は、よくわかっていません。『紅潮』誌では、明治三九〜四〇年頃に友人宅にあった「塵却記」(数学教本)を借り正誤の付箋を付けたこと(「いたずら」『紅潮』第五号)、岩代の若松にて回覧誌「見儘聞儘思儘」を見たこと(「無題」『紅潮』第壹号)などがわかります。各地へ旅していたと思われませんが、地元に戻っている時もあったようです。

明治四十年代に入ると、宇平は地元の三重村に戻り家業の農業に従事していたようです。宇平は、明治四三年四月、四名の創立員とともに「農事共励会」を設立し会長となりました。規則には、向う五年間は果樹などを毎年五本以上植え栽培の改良を加えることや、共同購入・共同販売が記されています。実際に宇平は「遊園を兼ねた果樹園を懇いて詩的な生活をして居る」(「三重の社友」と記されています)。

宇平は、昭和三(一九二八)年にも「三重村字三重第五農事実行組合」を結成し共同耕作を行いました。宇平は、農業に対して、共同精神の思想をもっていたことがわかります。

## 郷土史研究へ

宇平は、明治四五(一九二二)年七月一日より大正三(一九一四)年三月三日までの短い期間でしたが、三重村役場の書記となりました。この期間に宇平は、全国の三重村の比較研究を行っています(『言行三束』)。宇平は、役場退職後も関心を持ち続け、『紅潮』誌や『三重郷土志』にも紹介しています。宇平は、地元の三重村が人口や土地面積に比べて生産収入が少ないことを指摘し、林野面積は広いが荒廃して顧みられていない現状から林野整理事業の必要性を考えました。その後、宇平が三重村の入会林野問題で先頭に立ち、全国の事例を比較研究する素地は、この段階にさかのぼるものといえます。

あわせて宇平は、郷里三重村の歴史を調べ、村誌を作ることを決意しました。『立石之記』は、役場書記時代に、三重村字森本(京丹後市大宮町森本)の立石大逆修塔(市指定史跡)の銘文を読み、過去の文献を検討したものです。宇平の郷土史研究の萌芽が読み取れます。

なお宇平は、暗くなってから立石大逆修塔へ灯をかざす方法で磨滅した銘文を読んでいた。そのため、たまたま近くを通りかかった人にお化けと間違われたというエピソードが残っています。

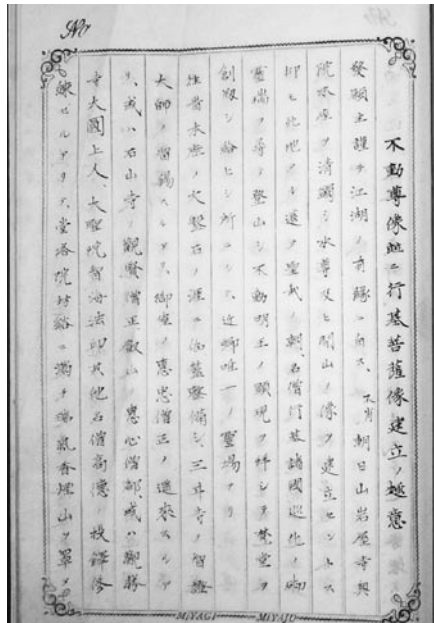




岩屋寺奥の院 影向の滝と不動明王像



岩屋寺奥の院 白糸の滝 (大正4年)



不動尊像行基菩薩像建立勸進帳



「大正実語教」隷書(『紅潮』第貳拾八号)



回覧雑誌『紅潮』

## 岩屋寺奥の院再興

宇平は、村誌編さんのため、各地の資料収集を行いました。大正三(一九一四)年秋には、神宮寺普門院(与謝野町石川)の「朝日山記」に、岩屋寺(京丹後市大宮町谷内)奥の院種字に関する記事を見出します。現地に種字を発見した宇平は、これに補修を加えました。

その後、大正四年に「岩屋寺不動尊像並二行基菩薩像建立ノ趣意」を記し、翌年には寄進を集め石造不動尊像を建立し、自費を投じて籠堂を建てました。あわせて、禁筆を解き、不動明王像を描きました。

## 回覧雑誌『紅潮』

宇平は、大正四年八月より、回覧雑誌『紅潮』に参加します。『紅潮』は、毎月一〇日を発行日とし、各自がそれまでに原稿を寄せ、編輯局にて項目ごとに分類され編綴されました。当初は、口大野村(京丹後市大宮町口大野)を発行所としていましたが、すぐに「三重村字三重九百五十四番地」と宇平の住所が発行所となっています。宇平は、当初より中心的な役割を果たし、実際の編集にもあたっていたようです。そのためこの世に一冊しかない回覧雑誌の大半は、宇平のもとに伝わりました。

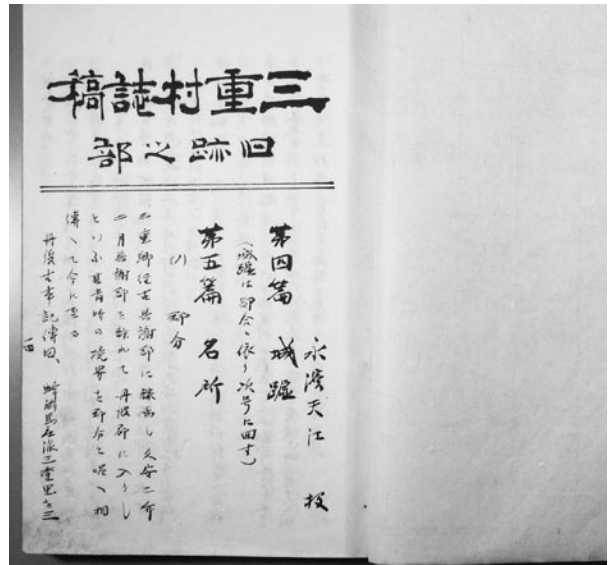
『紅潮』が創刊された大正四年の秋は、中郡の小作人などが奨励米の増額を郡農会へ申し込む中郡連合小作団が結成され、宇平はその中心的な立場に立っていました。自伝『言行三束』には「貧乏への道」と自嘲気味に記していますが、宇平の視点が身近な人々の立場に立っていたことがわかるものです。『紅潮』誌上の宇平は、第二号を除くほぼ毎号に記事や絵画、題字も寄稿しており、小作団の動きを全く感じさせないものとなっています。当初は小学時代や日露従軍時の絵画などを多く寄せていましたが、井上円了の丹後巡講前後には哲学館時代に円了のもとで学んだ内容を記した原稿が増えます。後半には、同人の夢汀楼のすすめもあり、村誌編さんに伴って作成した原稿や収集した資料の紹介が見られるようになります。『三重郷土志』編さんを行っている時期と重なる資料であり、大正時代の宇平の思想や、幼少から青年期の絵画の様相などがわかる貴重な資料です。

『紅潮』誌は、大正六年二月発行の第二八号までの所在を確認していますが、その後の動向は不明です。第二三号の問答欄開設以降は、質問・議論が増加する傾向にあり、原稿量も減っています。

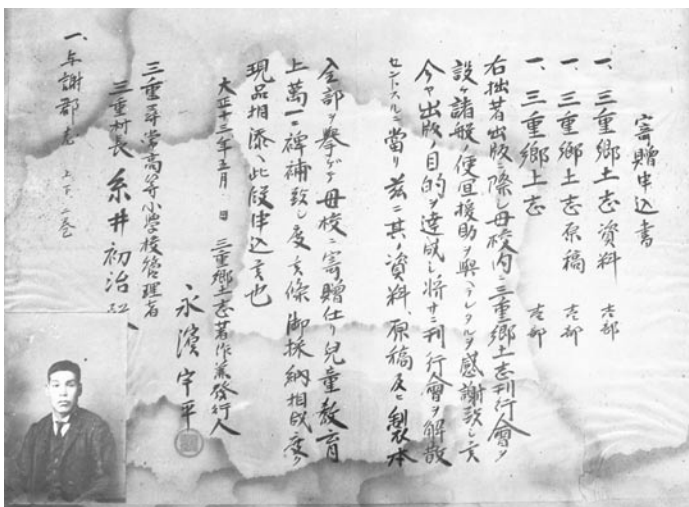




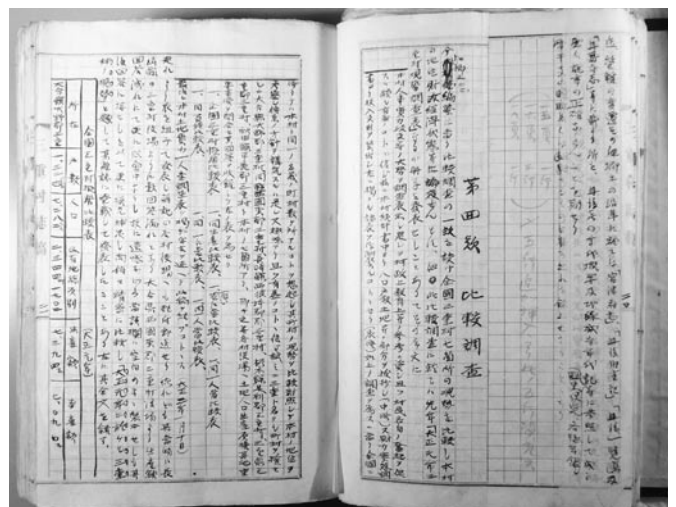
三重郷土志原稿（右）と資料（左）



「三重村誌稿」〔紅潮〕第貳拾壹号



三重郷土志資料・原稿・刊本寄贈申込書



三重郷土志原稿（部分）

## 『三重郷土志』の発刊

宇平は、大正初年より一〇年前後の期間と大変な労力を投じ、最終的には本文一一五〇ページにおよぶ大著『三重郷土志』の原稿を完成しました。『三重郷土志』発刊にあたっては、「三重郷土志刊行会」が設立され、大正二年五月に刊行されました。

直筆原稿の厚さは、一〇・五センチメートルあります。現在のよう  
にパソコンやコピーがあるわけではないので、ほとんどすべてを毛筆  
による手書きで執筆しています（その後の町村誌の原稿は万年筆を用  
いて執筆しています）。この『三重郷土志』の刊行は、その後の宇平の  
方向を決定付けるとともに、その後の郡町村誌執筆の基礎になったと  
いつても過言ではありません。

『三重郷土志』は、全部で五編から構成されています。原稿には、  
執筆完了年月日が記されています。

- 大正 三年 九月二日 第四編礼祀、
- 大正 四年 三月二三日 第五編史蹟、
- 大正 五年 二月二日 第三編制度、
- 大正 八年 八月二〇日 第二編民俗、
- 大正一〇年 一月二〇日 第一編総論

宇平自身も記すように、本の後半部分から執筆を始めており、最後  
に総論を執筆しています。原稿には、貼紙や朱書による校正が数多く  
見られるため、当初の原稿を作成した後に、何度も手を入れていたこ  
とがわかります。本書に対する宇平の情熱がうかがえます。

また本の題名は、当初「三重村誌」の予定で、原稿用紙の柱書にも  
「三重村誌稿」と印刷されていますが、途中の「三重村郷土誌」を経て、  
最終的には「三重郷土志」となりました。巻頭には、地元の三重村長  
などの序文のほか、東洋大学（哲学館の後身）の境野学長や東京帝国  
大学の黒板勝美などの序文があります。黒板と宇平との接点などの段  
階にさかのぼるかは今後の課題ですが、その関係が注目されます。

なお宇平は、『三重郷土志』刊本および直筆原稿・資料を、母校の  
三重小学校へ寄贈しています。その後の宇平は、自分が編さん・執筆  
した町村誌などの発刊後に、直筆原稿と刊本を三重小学校へ寄贈して  
います（いずれか片方の場合もあります）。宇平が寄贈した直筆原稿・  
刊本は、その大部分が現在も残されており、宇平の業績をふりかえる  
上で重要な資料といえます。

## 「父、永浜宇平を語る」

平成三年九月二六日(日)に丹後市民局二階にて開催しました「第一回京丹後市文化財セミナー」の第二部「父、永浜宇平を語る」を文章化したものです。お話しいただいたのは、永浜宇平の末娘にあられる糸井貞(みさお)さんです。

(開会あいさつ) 本日、岩滝から非常に無理なお願いをしまして糸井貞(みさお)様をお迎えしております。

宇平さんの一〇人の子どものさんの一番末の娘さんとおうかがいしており、また別の永浜宇平さんのお話をおうかがい出来るのではないかと思っております。それでは、みなさま盛大な拍手でお迎え下さい。

(司会) では後半ということで始めさせていただきます。前にお座りいただいたのが、永浜宇平さんの一〇人のお子さまの中で一番末の娘にあられる糸井貞さんでございます。今回、宇平さんの展示を開催させていただきますにあたって、資料調査の一環として、色々とお話をおうかがいし、宇平さんの生前のお姿をご存知なのは、おそらく貞さん以外におられないのではないかと思われました。その中で、「九月二六日が宇平さんの誕生日であり、生誕三三〇年の節目の年にあたるのでこの日にお話しただけませんか？」と無理なお願いをさせていただいたところ、「快諾いただきこうしてお越しいただきました。私の方から、宇平さんに関して貞さんにご質問して、それにお答えいただくような形で進めていき

たいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

まず最初に、女性にお年をおうかがいするのは大変失礼かと思ひ躊躇してしまつたのですが、生前の宇平さんをどういふ背景で貞さんがご存知かというところを知つていただくためにも、貞さんのお生まれになつた年をおうかがいできればと思つています。

(貞さん) 私は大正二五年(の生まれ)です。

(司会) 大正二五年ということ、ちょうど『丹後宮津志』『石川村誌』の編さんが終わり、『丹後史料叢書』編さんをされている時期のお生まれということで、宇平さんがたくさんの町村誌を書かれていた時代にお生まれになられたということになります。

貞さんは一〇人兄弟の一番下にお生まれになつたとうかがいしていますか？

(貞さん) そうらしいです。上の兄二人は小さい時に亡くなつていたので、わからんです。

(司会) 郷土史家として知られている宇平さんですが、実際に家ではどのようなお仕事をされていたのでしょうか？

(貞さん) 家ではもう・・・ほとんど机にむかつていましたので・・・家庭的なことは別に・・・忙しい時だけは外仕事にでるといふ程度で、ほとんど机にむかつていました。

(司会) 家では田んぼはしておられましたか。

(貞さん) ええ。田んぼも作っていましたけれども、農繁期に出るくらいで、ほとんど母親がしていました。

(司会) それは貞さんのお母様が・・・。(貞さん) ええ。そうです。農繁期には出ましたけれども・・・。

それから昔のことですから、一年中の焚きものが全部まき(薪)だったので、一年中のまきを家に持つて帰らないといけなかつたです。山の根切りといつて、春、芽が出るまでに大きな木でも、全部根元から切つておくのです。そうするとそれを切るだけを切つておいたら、お母さんが暇にまかせて、それを細かいように切つて束ねて家に持つて帰る。そういうことでしたので、根切りという事には出ましたし、田植とか、稲刈りとか、稲こぎとか、農繁期には出ましたですけども、ほとんど外仕事は母親に任せきりでした。

(司会) やはり二万三千ページにおよぶ本を書かれるということ、(家業の農業よりも)机に向かつている姿を一番よく覚えておられるという話をおうかがいしました。続きまして、宇平さんの時代はどんな生活をされていたかということで、どのような背景で郷土史の研究をされていたということに関わつておうかがいしたいのですが、家には自動車はありましたか。

(貞さん) ありません。

(司会) 宇平さんは岩屋村や与謝郡の各地へ行つておられますが、その時に自動車でなければ歩いて行つておられたのでしょうか？

(貞さん) ほとんど自転車でした。その自転車もまた古ぼけたような明治時代に古いのを買ったような、い

つづぶれるかわからないような古い自転車でした。

(司会) 宇平さんは、与謝郡を中心に町村誌の編さんなどを行われていますが、宇平さん自身は自動車をお持ちでなかったということで、自転車ないしは歩いて、一部には電車が開通していましたのでこれを利用してとといった感じで丹後二町の資料を見ておられたということになります。今ですと自動車で移動するので、「何日何時におうかがいします」ということで、資料調査をお願いしていますが、当時は、移動するだけでも大変であったことがわかるかと思えます。

次の質問ですが、電話はありましたか？

(貞さん) 電話もありませんでした。電話は、お医者さんがすぐ近くでしたので、お医者のところへ電話がかかってくるとお医者様が走って呼びに来て下さいました。電話の相手は、待っている時間が大変だったと思います。

(司会) 今では携帯電話もあり便利ですが、宇平さんの時代は手紙か電話、電話をかけても一軒ごとにあるわけではないので、電話のある家にかけて、かかってきた家の人が、呼びにくるということですね。電話をかけるときはお医者様のお宅に行つてかけていたのでしょうか？

(貞さん) 三重に電話のある家は二軒でした。どこにあったかはわからないのですが、一般家庭にはどこにもなかったです。

(司会) 連絡をとるのも大変な時代だったというのが

わかります。あと宇平さんが机に向かい、原稿を書かれている時は、ローソクの明かりだったのででしょうか、それとも電灯はありましたか。

(貞さん) 私が覚えている頃は電灯でした。ハダカ電球で二〇燭とか一六燭とか・・・、普通の家庭だと二〇燭が二つで、食事する時はこっち炊事の時はあっちにと移動していましたが、私のところは父親が机に向つたので、机のところだけ一六燭の電燈をつけて、一〇燭と一六燭の二つでした。だから、ろうそくをつけての生活は知りません。

(司会) 宇平さんというと郷土史の原稿を書いているというイメージがとて強いのですが、そちらのお話をこれからおうかがいしたいと思います。宇平さんは郷土史の原稿を本場に四六時中書いていたという感じですか？

(貞さん) 私にしてみたら、原稿を書いていたのか何を書いていたのかわかりませんが、とにかく机に向つていましたね。

(司会) 昭和七年に刊行された『岩屋村誌』の原稿を書いている宇平さんを貞さんはよく覚えておられるということですが・・・？

(貞さん) その頃の私は小学校へ入る前で、今みたいに幼稚園や保育所がないし家にも邪魔になるし、母親について山に行つても危ないし、田んぼ行つても遊ぶところがないし、畑にはついて行きましたけど・・・。

でも父が、『岩屋村誌』を作っている時は、おんぼろの

自転車の三角のところ、今、警察の人が乗っているような自転車の前に座布団を四つ折にして、そこへ(私を)乗せて岩屋村の役場まで行きました。

(司会) 岩屋村に行った時、宇平さんは多分資料調査をしたりしていたと思いますが、貞さんはどうされてましたか？

(貞さん) 役場の方が時々遊んだりはしておくれましたが・・・何もすることがないので、行つて昼寝するくらい。でも起きたときがうれしかったです。家ではさつまいもとか柿とか栗とかを食べていて、お金をかけたおやつは食べたことがなかったけど、岩屋では枕元にお菓子が置いてあったのでそれが本場にうれしかったのを覚えています。

(司会) 今と比べると、非常に質素な時代のお話だと思います。実際、宇平さんが役場へ何の用事で行つたのかはわかつておられたのでしょうか。

(貞さん) その頃の私では、岩屋村へ何をしに行つたのかはわかりません。

(司会) 今でいう保育所の頃ですから分からなかったということですね。さて晩年になると、昭和二年に峰山町誌を引きうけ、日置村誌・岩滝町誌と三つの町村誌の執筆をかかえていたと思いますが、その頃の貞さんは学校に行つておられたのですか？

(貞さん) そうですね。

(司会) では、その三つの町村誌を書いておられた時の思い出は何かありますか。



(貞さん) 峰山に行つてよようか、今日は日置に行つ

てよようかということとはよく聞きましたが、何しに行つたかは、よく知りませんでした。岩滝町誌の時には学校を卒業する間際でして、戦時中で食料不足だったので米だけを持って岩滝の役場へ行きました。おかずは役場の用務員さんが作ってくれて、二百くらいは泊まってくる・・・そういう生活でした。

(司会) 岩滝町誌を書かれていた昭和一〇年代は、戦時中で食料事情が悪くなっていたのですね。そして、お米だけを持って役場に行かれた。二日くらい家を空けられていたのですか？

(貞さん) 水戸谷(峠)を通るので、毎晩帰るのはしんどいですし、日置の方へ行った時もそうでした。

(司会) 宇平さんの移動手段というと自転車しかなかった訳で、日置や岩滝へ行くのも距離があるので大変だということで、資料調査の時は何日か泊まっておられたということですね。先ほどの町村誌の話ですが、助手の小関梅治さんという方がおられたと思うのですが、小関さんについて何か覚えておられることは？

(貞さん) 小関さんは(三重村)役場の職員さんで、おとなしい方でしたが、言葉はてきぱき話す賢い方でした。あちこちに兵隊で亡くなった人の村葬があり、村の人だけでなく知事とか、偉い人も見えると、よその村からも村葬の司会に来てくれと頼まれて行つたり・・・。

(司会) 小関さんは三重村役場の書記をされていた方なのですが、娘さんが二人おられ、お一人は永浜家へ嫁

いでおられましたね。

(貞さん) そうです。私のところへ姉の方が・・・

(司会) 妹さんがおられたのでお話をおうかがいしたところ、三重村役場の兵事係をされていたそうです。さきほどのお話はこのことをさしていると思います。残念ながら小関さんが宇平さんの助手をされていたのは大正時代で、その方や貞さんがお生まれになる前なので、その時の状況を覚えておられる方はないようです。あと町村誌の關係でおうかがいしたいのは、写真はどうのようにされていましたか？

(貞さん) 写真は、(加悦の)中上さんから写真機を一台借りっぱなしにしていました。今のカメラみたいにとどこでも写せるものではなく、どうしても(三脚で)据え付けて撮らなければならなかったので、中上さんから借りっぱなしにして、いつでも家にありました。だから兄たちが兵隊に行くときの家族写真などでも家で撮りました。

(司会) 宇平さんが写真を撮っていたのでしょうか？

(貞さん) 家族写真という宇平も入りたいので、その時は、その辺りにいる人に頼んで写してもらいました。

(司会) ちなみにそのカメラは、ネガかガラスかどちらを使われていたか覚えておられますか？

(貞さん) ガラスでしょうね。

(司会) 今はデジタルカメラが普及していますが、少し前はネガで、ネガの出る前はガラス板に感光剤を塗るタイプのガラス乾板だったわけです。それを使われ

ていたのでしょうか？

(貞さん) そうです。それを(印画紙に)焼かないといけないのですが、焼くのは中上さんでした。

(司会) 加悦の中上さんへ行くのは遠いと思いますが、それは中上さんが取りにこられたのですか？

(貞さん) 写真を取りに父が行つたり、中上さんが来たり・・・。中上さんは昔の親戚になるらしいです。どんな親戚になるかは分かりませんが・・・。

(司会) 今でも加悦にある中上写真館から写真機を借り、調査に行つた先では宇平さん自身が撮っておられたのではないかというお話でした。

ここまでは郷土史家の宇平さんについて聞かせていただきましたが、次にプライベートな面で、宇平さんはどんなお父さんだったか、宇平さんのお人柄をお聞かせいただければと思います。貞さんが学校に行かれていた時、宇平さんは先生としてお話をされていたというようなことをおうかがいしたのですが、どんなお話をされていたのでしょうか。

(貞さん) 丹後地震(丹後震災)の話をしました。今でいうと、小学校の一年から中学校の二年、昔の高等科まで八年間の人間が一つの場所にあつまつて、父の話を聞くものだから、あくびしないように話すというところが大変だったろうなと思います。怖い話をしてみたり、笑うような話をしてみたり・・・。

赤ん坊が寝ていても、ほっといて飛んで(家から)出て行く。そうすると赤ん坊が泣いていると行って走って

(家に) 入る。その間にまた余震が来る。夕方だったのでこの家も風呂を焚いたり、かまどに火をつけて夕飯の準備をしたりして、またその年は雪が多かったので、余震の間に必ず雪を手を持ち、おくとさんに突っ込んで・・・それが地震の(時の) 仕事だったという話をしていました。

あと、地震が起こればお風呂に入っている、何も着ずにすっぽんぽんで出て来たり、そんな話をするものだから、子供たちが手をたたいて喜んでいました。小さい子が飽きたり、眠ったりしないように話するのは大変だったと思います。

(貞さん追加) 話の中で私が小さいながらに感動したのは、地震後、村中の人が出て、家の傾きが酷くて住む事の出来ない家から順に、今日はこの家、明日はあの家と順番に家起こしに手分けして廻り、助け合って何んとか家の中で暮せるようになった、皆村中の人の助け合って今日の日があるのだという事を聞いて感涙したのを覚えています。

(司会) 宇平さんが学校でお話をされていると、貞さんは周りの友達から、「貞さんのお父さんだ」と言われたりもしますよね?それは恥ずかしくはなかったですか? (貞さん) 言われますよ。なんかこう、恥ずかしいよ。うな・・・でもだんだん慣れてきました。

(司会) 『丹後地震誌』も書かれています、地震の研究も郷土史研究の傍らされていたということで、それで多分学校でお話をされていたのでしょうか。

あと宇平さんは学校の役などはされていきましたか?

(貞さん) あの頃は育友会とはいわず保護者会と呼んでいましたが、保護者会長をしていました。

(司会) 今というPTAですね。宇平さんは斬新な考え方をされる方というイメージがあるのですが、保護者会長をされていた時に何か新しいことを始められたということはありませんか?

(貞さん) あまり記憶はないのですが、三重村の学校には修学旅行がなかったのです。私が一年生に入った年に月に一〇銭づつ貯めて五年で五円貯まったら修学旅行に行けるので、そのようにしたらどうだろうと、父が発案して、みんな賛成してくれました。

でも父からその話を聞いたのではなく友達から聞き、その時はじめて私たちの代から修学旅行に行けるという事を知りました。三重の学校で初めての事でしたが、それも二年続いたか、三年続いたか・・・、戦争で行けなくなってしまいました。

(司会) 今は修学旅行も当たり前前の時代なのですが、その頃は貞さんの代から修学旅行に行けるようになったんですね。それは宇平さんが発案されたというお話でした。ところで宇平さんは書かかれていたと思うのですが、書について何か思い出はありますか? (貞さん) 何年頃かはわかりませんが、唐紙に隷書を

書いていたのを覚えています。(司会) 以前、おうかがいしたときは字を間違えたと言っておられたかと思うのですが。

(貞さん) 「秋」という字が禾へんに左にこなければならないのが反対で、「ああ間違えた!」と言っていました。よその書き物でもよくしますが、人に頼まれたなら放っておけません、家のだから放っておこうという感じで・・・。

そしてこの襖を家に立ててたら、こんな襖は珍しいので、破ったり落書きしないようにとっておいてほしいと(丹後郷土) 資料館に言われて。それなら寄付しますということで寄付しました。

(司会) その襖は、現在、宮津市府中の丹後郷土資料館の所蔵になっております。もともと永浜家にあった宇平さんの資料はほとんど、丹後郷土資料館に行っています。直筆原稿については、京丹後市の所蔵であり、丹後郷土資料館へ寄託しています。晩年の峰山町誌編さんの関係資料については京丹後市所蔵で峰山図書館にあるという形になっています。

さて書については、先ほどおうかがいしましたが、絵も上手でした。絵については何か思い出があるでしょうか?

(貞さん) 間人の城嶋の弁財天の絵を書くのに家の戸や襖を全部外して、原画を描いていたのは覚えていますが、石があつて彫り込むだけなら正面だけで良いのですが、何メートルあるのか、三メートル、四メートルあるのか、横も裏も前も書かないといけないので、家中にこの弁天の絵が張ってありました。

彫るのは石屋で、鱒留の田中作治さんだったか丁寧



城嶋 弁財天像（京丹後市丹後町間人）

に物言う人で、「先生、先生」と言って「先生、髪  
形をどうしたらよいですか」などと聞いてられたので、

丁寧な彫ってくれていたと思います。人柄の良さそ  
うな方でした。

（司会） ほかに貞さんが学校に行っておられたころの  
宇平さんの思い出は？

（貞さん） 家が横溝こうと、雨が漏れようと平気な人  
でしたが、とにかく家庭円満ということは心掛けてた  
ようです。私の上に三つ年上の姉がおり五つ年上の兄  
がいたのですが、子供の時にはしょっちゅう口ゲンカを  
していました。父もうるさいので、「ここに座りなさい」  
と、三人ちよこんと正座させられ、私達は何を叱られ  
るのだろうとドキドキしていたのですが、しばらくす

ると、歌を唄い始めたんです。その歌が、

「♪あの子は意地悪へそまがり。」

いたずらするやつ水かけろ♪。」

つて、ものすごくひょうきんに唄うものだから、ケンカ  
の続きが出来なくなってしまう、これで終わり、笑って  
終わり。そういう家庭だったので、父親が大きな声で  
怒鳴るとか兄たちも大きな声で叱られたことは一切な  
いといっています。私は末っ子で特に甘やかされて育っ  
たと思いますが、兄たちも父親に大声でどなられた記  
憶もないみたいでした。父は同じことを二度も言いま  
せんが、その二言が厳しかったですね。  
「こんなボロ家で隙間だらけの家でも、家の隙間から、  
笑い声が聞こえてくるような家庭でないといけない。怒

鳴り声なんか聞こえてくる家庭ではいけない。隙間か  
ら聞こえるのは笑い声でないといけない。」とよく言っ  
てました。だから、家庭内では人が思っているよりは、穏  
やかに過ごさせていたのかなと思います。側から見たら、  
気難しい人と思われていたかも知れませんが……。

（貞さん追加） 家の屋敷が広いので裏庭に何本か覚え  
ていませんが、門先に大きな柿の木が二本あり、学校  
帰りの生徒が登り柿を取って食べている所へ宇平が出  
て行き、「コレコレ黙って取って食べる者は泥棒だ。一言  
おくれと言ったらやらんと言わん。だから断ってから  
にしなさい。」このようなことは何回かありました。父  
も柿を取って食べることもよりも無断という事の大胆さ  
を言ったのだと思います。

（司会） 宇平さんが難しい方だということはあまり聞  
かないですし、今までに書かれているものを見ても、  
難しい方ということは書かれていなかったと思います。

（宇平さんは） 言っても一回だけだったのでね。

（貞さん） そうです。言うのは一回だけ。でも女はど  
うしてもくどくど言いますし、そうすると「お母さん、  
言い事は一度でよい。」そう言っておりました。

（司会） 歌を唄われるというのは、私も初めておうか  
がいましたが……。

（貞さん） そうですね。陽気に唄うものですから……。  
だから貧乏はしながらも、割と穏やかな家庭で育った  
なあと思います。貧乏ということは子供たちもみんな  
よくわかっていましたし、母親も子供の前では父親に



「働いてくれたらもっと楽になるのに」という愚痴はこぼさなかったし、みんなに「お父さんは偉い人なんだ」と言い聞かせていました。母親自身は父親に対し、必ず敬語でした。必ず。

私たちが貧乏で大きくなってきましたので、兵隊に行った兄が初めて学校を卒業し初任給を頂いた時に、新しい自転車を買ってあげたのです。今まで古い自転車でしたから。一つ上の兄は、戦地に行く時に、「どこそこの畳の下に、お金が少しだけ置いてあるので使ってほしい」という手紙をよこしておりました。だから私も、奉公に出たら、お小遣いも取らずに全部父に渡さないといけないと思い、一日も休まず一生懸命働いていましたが、一番最初の給料をもらう前に亡くなりました。丁度、私の十五才の誕生日に亡くなりました。

(司会) 宇平さんは昭和一六年の六月に亡くなられているのですが、貞さんが奉公に出られていたのは？

(貞さん) 昭和一六年の四月に入社しました。あの頃はお盆にならないと、初任給がもらえなかったのです。(給料がもらえるのは) 盆と正月でしたので。盆の初給料を待たずに亡くなってしまったのが、残念です。それと、私が岩滝に嫁いだので余計にそう思うのですが、岩滝町誌を完成させてほしかったなど・・・。

(司会) どの程度出来あがっていたか、お聞きになったことは？

(貞さん) それは知りません。

(司会) さて長時間にわたり、貞さんにお話していた

だいた訳ですが、時間も迫ってきましたのでこの辺りで終らせていただきますと思うのですが、貞さんにとって宇平さんは大変やさしいかただったんですね。

(貞さん) はい、そうです。

(司会) 我々にとつては、あれだけ細かい作業をしておられたので結構厳しい方なのかという印象があった訳ですが、貞さんにとつては優しい方だったというお話を最後におうかがいできたかと思つています。それではこの辺で、締めさせていただきますと思いますが、今日初めておうかがいした事も結構あり、貴重なお話をおうかがいさせていただけたと思ひます。本当に今日は貞さん、ありがとうございます。

#### 写真所蔵一覧

(記載のないものは京丹後市所蔵、撮影はすべて京丹後市表紙(上四角) 明治三十三年五月二〇日撮影、アンプロ湿板の永浜

宇平肖像写真(京都市立丹後郷土資料館所蔵)、

(下)『三重郷土志』発刊当時の永浜宇平肖像写真

1 (右上・左下) 京都府立丹後郷土資料館所蔵、

(左上・右下) 個人所蔵

2 (上中・右下) 個人所蔵、ほかは京都府立丹後郷土資料館所蔵

3 (右上) 個人所蔵、ほかは京都府立丹後郷土資料館所蔵

4 (右) 東洋大学(中・左) 京都府立丹後郷土資料館所蔵

5 (右上) 京都府立丹後郷土資料館所蔵、ほかは三重区所蔵

6 (右上・左上・右下・中下) 京都府立丹後郷土資料館所蔵

7 (右上・右中) 京都府立丹後郷土資料館所蔵、

(右下) 京都府立丹後郷土資料館所蔵および個人所蔵、

(左下) 個人所蔵

8 (右上) 個人所蔵

裏表紙(右上) 十六善神像(岩屋寺所蔵)、(左上) 不動明王像(岩屋寺所蔵)、(右下)「Nagahana Nippoukwan」とペン書された「二年有半の哲学と万世不易の哲学」(左下)「倶楽部合作」『新潮』第九号下巻(個人所蔵)

#### おわりに

本小冊子は、平成二二(二〇一〇)年が永浜宇平生誕一二〇周年にあたることから開催した記念展示の記録集です。

記念展示の企画および本小冊子の編集は、新谷勝行(京丹後市教育委員会事務局文化財保護課主任技師)が行いました。なお後半の「父、永浜宇平を語る」は、テープ起しを坪倉裕子(丹後古代の里資料館)が行い、新谷が補訂した後に糸井貞さんに校正をお願いしました。その際に貞さんからは、追加の思い出を文章にさせていただきました。本文には、(貞さん追加)として注記しています。

展示開催および本記録集作成にあたっては、多くの方々のご協力をいただきました。記して感謝します。

京都府立丹後郷土資料館、東洋大学井上円了記念学術センター、岩屋寺、三重区、宮津市立図書館、糸井貞、川井龍介、永浜正丈、道家二三子、三浦節夫、三井圭司、渡邊義孝

(順不同、敬称略)

#### 永浜宇平の生涯 1

～丹後が生んだ偉大な郷土史家～

編集・発行 京丹後市教育委員会

発行年月 平成二三年三月発行

印刷 有限会社三丹印刷



此像乃... 永保元年...  
 三寶御法...



寶... 永保元年...  
 六...

辰蔵格二才記念



...



天... 永保元年...  
 花山...

日本館圖書室藏書

Nagahama Nipponkwan.